

暫くご無沙汰していましたが、Les non-dupes errentに引き続きその後のラカンのセミナールを読んでいきます。いま現在、1975-1976のセミナールR.S.I.にとりかかっており、1975年3月11日のセアンスまではアップする目処が立ちました。見直しのための時間もかかりますので、Le Sinthomeまではとりあえず2~3週間に一度のペースでアップするつもりです。今回よりSTAFERLAで読むことにしました(<http://gaogoa.free.fr/SeminaireS.htm>のSTAをクリックしてそれぞれのセミナールを読むことができます)。これがラカンの話の音源に一番近いですし、臨場感を感じることができるのでそうしました。古いセミナールではこのSTAFERLAもある程度編集が行き届いているのに、このR.S.I.では段落分けなどこれからという感じですし、こうして小生が読んでいる過程においても、編集作業によりテキストの一部に修正がなされています。この編集作業はもちろん共同作業なのでしょうが、Patrick Valas(<http://www.valas.fr/-Jacques-Lacan>をご覧ください)STAFERLAで読むことのできないDissolutionも読むことができます)が精力的にこの作業を推し進めている筈です。忍耐強さが試される作業ですが、この場でかれの仕事に敬意を表したいと思います。

R.S.I.はEncoreやLes non-dupes errentと比べ、小生としては読みづらいです(Encoreはミレール版で読み、Les non-dupes errentはそこそよくできた匿名版の冊子 - ほぼGAOGOAOの内容と同じです - を読むことができました)。その訳はSTAFERLAが編集途上ということもあるでしょうが、内容についても、Les non-dupes errentとR.S.I.とは懸隔があるように思えます。Les non-dupes errentでのラカンは、各セアンスをある程度計画的に準備して話をしていったのではないのでしょうか。例えば、ほぼ同時代のヒンチッカについても一寸触れるというのではなく、そこそこ説明的に述べているし、ポロメオの輪を本格的に取り入れて話を進めていったのも同セミナールからなのですが、そこには、それ迄のかれ自身の業績がこのポロメオの輪に集約されて、sexuation等、論理を扱った70年以降のラカンがポロメオの輪という構造のいわばbien-fondéとして示されている部分が多く、ですからそこそこ論述的でもあります。R.S.I.以降もポロメオの輪に基づいて話は連綿と続くのですが、R.S.I.では特にこのポロメオの輪により精神分析の諸概念(フロイトのもラカン自身のもです)を再構成しようとする努力が窺えますが、これら諸概念をポロメオの輪(特にその平面化mis à platの図)上で説明しながらも、その説明そのものがやや舌足らずです(ラカンも74-5歳になっています。やや年を感じさせます)。その説明を補うものとして、Charles MelmanのÉtude critique du séminaire RSI de Jacques Lacanは役に立ちます。

次の年のセミナールSinthomeの方がよりポピュラーでMiller版も既に出ていますが、Sinthomeをちゃんと理解するためにはR.S.I.の読解が欠かせないことは強調しておきます。

STAFERLAですとラカンのことばは言い淀み(そこで段落が切り替わることが多い)、不完全構文が多く、邦訳しにくいですので、文意を尊重する方針で、いままでは部分的に邦訳を差し入れていましたが、ここではその比率は少なくして註釈に力を入れて行きます。関連する文献の重要性は増します。一応セアンス毎に発表しますが、理解する上で内容が前後することもあります。

今回のアップ分は1974年11月19日のセアンスです。